

Doré, Gustave

Two hundred sketches ; humorous and grotesque.

Boston, Roberts Brothers, 1867. (文献番号11-154)

Hiler p. 245

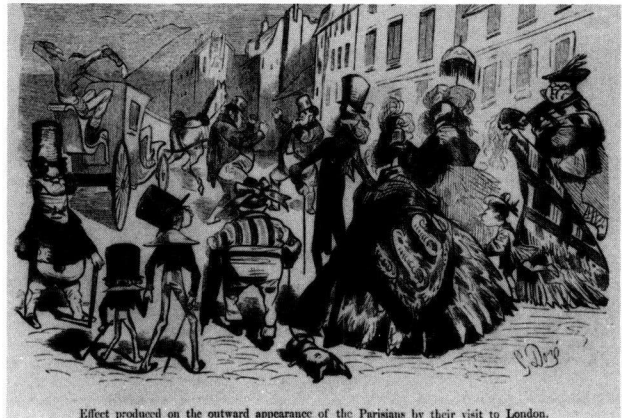
ドレ画

スケッチ 200点；ユーモアとグロテスク

フランスの画家、彫刻家、素描家であるドレ(1832-1883)はストラズブールに生まれ、19世紀半ばの挿絵家としても名高く、とりわけバルザックの「コント・ドローラティーク」(1855)、ダンテの「神曲(地獄編)」(1861)、セルバンテスの「ドン・キホーテ」(1863)、「聖書」(1866)などの挿図が良く知られている。一方、彼は大型本図版のヨーロッパへの普及にも貢献した。

彼の作品はグロテスクなものに対して、むしろ天真らんまん(爛漫)で子供のような態度で接した点に特徴があり、ロマンティック趣味の商品化を演出している。風刺に対する天賦の才能はラブレーの作品への挿図にも明白に表現されている。彼は風習やあまり価値のない題材を誇張的に表現して、宗教画の大作も描いた。ホジャート(M. Hodgart)は、一種のぐう(寓)話であり、通常は政治的テーマを扱った幻想的な構成を意味する風刺画と個人の歪曲された肖像画であるカリカチュアが18世紀以来結びつき、最も一般的に影響のある風刺の形式になったと述べている(「風刺の芸術」(Satire) 山田恒人訳、平凡社、1970年)が、しかし、本書においてドレは彼独自のグロテスクをカリカチュア風に描き、ユーモア的であり、当時の生活の風刺画は現実的で、風俗性がよくでていいる。ひとりのグロテスク・デザイナーとしてのドレは、当代に並ぶものがなく、過去にも匹敵する人はほとんどいなかった、とある主要なロンドン文芸雑誌が記している。しかし、彼の挿図が掲載された作品はその優秀さを確立するために出版されたのだが、彼の独特の才能がありのままに示されていない面が多分にあるという。その中でも本書は彼をグロテスク・デザイナーの大家のひとりであることを明示した作品集であることは確かである。

木口木版による右の図は「1862年のロンドン博覧会の結果」と題する作品中の1枚。「ロンドンを訪れることによってパリジャンの外見的特徴を演出する効果」と付記されている。



Effect produced on the outward appearance of the Parisians by their visit to London.